



いわきの地域包括ケア、いごいてます！

igoku

紙のいごく

Magazine for Iwaki Masters

vol.4

2018
秋

号
TAKE FREE

いわきでいごいて死ぬ人たちのウェブマガジン「いごく」

<https://igoku.jp>

特集：
igoku Fes 2018
ライブレポート

写真特集：
老いの魅力 × 平間至

いごくとは、

いわき市でスタートした「地域包括ケア」の取り組みの“理念”を表す言葉。「動く」という言葉のいわき弁。人が健康で、幸せに、より長生きできるように、さまざまな企画、情報発信を展開しています。

■ 憧れ親しんだ公園に現れた
非日常で、いい時間を味わう

夕暮れ時の平中央公園。芝生のうえに置かれた明かりもステージに開いた蓮の花も、公園のなかの大きな木に飾られた照明も、すべてがキラキラと輝いて見えます。まるで「ニューヨークのセントラルパークかよ」って突っ込みたくなるくらいのおしゃれ空間。

美味しいビールではろ酔いになつてみると、舞台上に父ちゃんと母ちゃんが集まつきました。んまつーポスの即興ダンスワークショップです。参加者全員が、とにかくいい表情。普段は閉じ込められがちなハツラツとした何かが思い切り漏れ出していました。これこそ「体育」のもつ根源的な楽しさや開放感なのでしょう。

続いて Tariki Echo 登場。お経をサンブリングした「ツッタサウンド」とコールアンドレスポンスの「なんなんなんだぶ」で会場を制圧。いい感じに盛り上がり始めた会場の皆さんも、中毒性の高いリズムに体を揺らしながら「なんなんなんだぶ」なぜか体がふんわりと浮き上がったように感じられます。私たち、いつの間にか極楽を放してしまっていたのかも?

続いては、いわきの即興パフォーマンス集団、十中八九。それぞれの楽器パートがあるのに、演奏が進むとぎゅっと一休感が増して、個別の音と、1つの集団が奏でる音が重なる感覚になります。吹く風すら樂団の一部のような。そんな不可思議なグルーヴ感。それが心地よくもありました。

4組目は、泉崎青年会によるじやんがら盆踊り。通常のものより輪切りの部分が長くなつていて、観衆もその輪に加わ

■ 極楽浄土のグルーヴが、世界を、この世を、美しくしてくれる

大トリは蔡忠浩。彼が歌うのは、人が生きることの喜びそのもの、と言つていません。些細な心の流れや、誰かを好きになることや、寂しいと思つてしまう心。それらを肯定し、あるがままを受け止めようという優しさが、歌から感じられました。

震災を歌つた「三月のプリズム」。公園の木々から溢れ出る電球の光が、まるでいわきの海辺の光のように無数の色をもつて体内に飛び込んでくるように感じられました。なんだかよくわからない、

れるようになつていきました。声に出して歌を歌うと、ライブの興奮と祖先に対する慰靈がごちやませになつたような感覚になります。でも、そんなじやんがらこそ、真のじやんがらなのかもしれません。

でもともといい時間。そんな時間に包まれて、会場のたくさんの人たちが、大切なひとのことを思ったことでしょう。いい時間は、きっとここにはいない人たちとも共有されたはずです。連綿と続く命の連鎖の、その一瞬の今。目の前の家族や恋人や、あの世にいる家族や友人がより大切な存在に思える。平の町がいつもより美しく見え、ビールがいつもより美味く感じる。

最後に歌つたのは「what a wonderful world」でした。仮も、福祉も医療も、音楽も芸術も、いずれは死んでしまう辛い人生を、よりよく生きるためにあります。あの世だけじゃなく、この世だって、見方次第で美しくなる。いごくフェスの前夜祭がこの曲で締めくくられたことに、思わずそんなメッセージを受け取つてしましました。ああ、本当にいい夜だつたなあ。

泉崎青年会

普段とは異なる「演出」でのじやんがらでした。唄にも踊りにも、様々な形があるのでということを改めて知ることができました。じやんがらってすばらしい!



十中八九

いわきを舞台に活躍する即興パフォーマンス集団。今回は、ステージをはみ出して踊るダンサーたちや、そのダンサーと戯れる子どもたちの姿が印象的でした。十中八九を前に、全ての存在がごちやませに交わっていくのです。



蔡忠浩

今回披露された「三月のプリズム」は、震災を歌つた歌で、そのミュージックビデオは、いわき市永崎で撮影されました。いわきでこそ歌われなければならなかった歌。会場の人たちの、真剣で、でもにこやかな表情が「いい時間」を物語っていました。



►特集 igoku Fes 2018

ライブレポート前夜祭編

あの世も、この世も、美しい

極楽浄土をテーマにした生老病死の大祭典「いごくフェス2018」。そこで私たちが目撃したものとは。極楽の光に包まれた2日間を渾身レポート。まずは、平中央公園を会場に開催された初日の「前夜祭」から振り返っていきます！

文 小松理虔／写真 鈴木穎藏 小松理虔



9/7
前夜祭編

igoku
Fes
2018



んまつーポス

アートの空間に体育を上演・展示するというパフォーマンスを行っているんまつーポス。この日は、父ちゃんと母ちゃんにスポーツ選手の有名なポーズを再現してもらい、それを舞台上に展示するという趣向でした。



舞台美術と平中央公園

極楽浄土にふさわしい蓮の花や、無数の電球、そして食のブース。中央公園がセントラルパークになりました。ディレクターは宮本英実(MUSUBU)、舞台美術・設計は小池晶子。ありがとうございました。そしてお疲れさま。



Tariki Echo

他力回向(たりきえこう)とは、そもそも仏教用語。自分の力で善行功德を積んで悟りを開くではなく全ては他力。つまり阿弥陀仏の力、本願によって悟りが開かれるのであるという浄土真宗の教え。だからこそお念仏。ライブを楽しんでいたり極楽に行けちゃった！



igoku 表彰式

今年のいごく表彰式では、かしま病院名誉理事長の中山元二先生。さらに、いわき市シルバーリハビリ体操指導士会の三田須生雄会長の二人が受賞されました。いわきで、今最も「動(いご)いて」いらっしゃる二人。これからもお元気で！！



立川志獅丸

有名な古典落語「死神」を、迫真的演技で演じてくださいました。機転のきいた笑いだけでなく、ぎゅっと目を見開いたり、顔を真っ赤にして苦しんで見せたりと迫力十分。落語の醍醐味を余すことなく披露して下さいました。



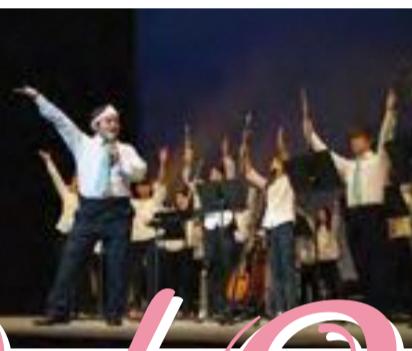
即興演劇集団
6-dim+ (ロクディム)

初回に引き続き即興演劇を披露してくれたロクディム。観客から採取した言葉を劇中に散りばめ、笑いあり感動ありの唯一無二の時間を作り出してくれました。カタヨセヒロシさんと渡猛さん、司会もお疲れさまでした！



いわき吹奏楽団

いごく表彰式では、いわき吹奏楽団がファンファーレやBGMを担当。「オラは死んじまつただ一戸」の演奏に始まり、会場を巻き込んだ「ヤングマン」など、表彰式に鮮やかな彩りと「ノリ」を注入してくれました。



►特集 igoku Fes 2018

ライブレポート本公演編

死の捉え方が変わる、 アングルシフト

9/8
[本公演編]

■彼岸から、此岸を見る

死後の世界なんて「ない」と思えばない。でも、本当に「ない」とは誰も証明ができない。だからこそ、あると思って想像して見る。例えば、棺に入つてみたたり、劇の中で死んだつもりになって残された家族に言葉を伝えてみたり。そんな「虚構」の世界こそ、現実を飛び越えて、普段は見えない景色を見せてくれるものです。即興演劇、落語、漫談に表彰式。本公演に共通するのは、向こう側からこちら側を見直してみること。

ロクディムの即興演劇では、三途の川を舞台に現世に未練を残す人たちが面白おかしく描き出されました。もっとちゃんと残せる言葉があつたんじやないか。登場人物の葛藤が、現実と虚構の間にあらわされる「即興演劇」という環境で立ち現

る。そして、ケーシー高峰師匠の漫談。漫談以前に、師匠の姿に驚いた人たちも多かったはずです。髪は白く、体は細くなったり、酸素の吸入器を持つている姿。師匠は、前回のいごくフェスからは想像できないほど老いていらつしやいました。しかし、それでも舞台に上がるんだという、一瞬に賭ける気持ちの鋭さのようなものは研ぎ澄まされているのでしょうか。私たちが見せつけられたのは、芸に生きる男の生き様でした。

れ「あなたならどうする？」という問い合わせてくれました。

立川志獅丸さんの古典落語「死神」。

現代社会に死神はいません。人間の健康は科学が説明する時代です。しかし人生には数値化できない幸せや悩み、葛藤があります。最期の最期、私たちは何を抱り所にするのでしょうか。科学？それとも神さまや仏さま？ 志獅丸さんの死神は、そんなことを問い合わせてくれた気がします。



いごくフェスならではの様々なプログラム

昨年に引き続き行われた「入棺体験」は、今年も大人気。本公演前の時間帯には、棺の前に列ができるほど。棺の中に入つて家族に声をかけたり、目をつぶってみたり。思い思いに「死んでみる」人たち。まさにいごくらしい空間でした。また、アリオスのフリースペース「カンティーネ」では、いわきで医療や福祉、健康づくりに関わる企業や団体のブースが出店されました。自分の健康状態をチェックする端末を体験したり、薬や食品のサンプルを味わってみたり。多くの人が訪れ、交流や体験を楽しんでいました。



私たち、いつか師匠とのお別れの時が来るということを感じたはずです。しかし、それは不ガティブな色なものではありません。師匠は「いかにその人らしく最終の瞬間まで生きるか」という根源的な問いを、私たちに突きつけてくれた気がします。その問いは、私たちの人生を、より豊かにしてくれるはずです。

■自分らしく生き切るために

公演に先立つて行われた「いごく表彰式」でも、二人の男性が、その生き様を見せてくれました。87歳の現役医師、中山元二先生。そして、いわき市シルバーリハビリ体操指導士会会長の三田須生雄さん。老いてなお元気に、そして自分の人生をポジティブに楽しみながら「動(いご)いて」いく。その生き様はかっこよくて、そしてとても楽しそうでした。人生は、そもそもが辛いものです。だからこそ一旦その現実を離れ、虚構の作り出す世界や、自分で体験できない他の人生にちょっとだけ触れさせてもらおう。すると、自分が見ていた世界が、いかに小さなものだったかに気づける。老いも病も死すらも、ありそうもない角度から光を当ててみると、見え方が変わってしまうのです。まさに「アングルシフト」。見え方が変わる気づきが、フェスのあちこちに転がっていました。



ケーシー高峰

ご存知ケーシー師匠は、持病を押しての10分限定での出演。「酸素も吸入して、腰も立たなくなつたけど、あそこだけは今も…」と、伝統芸の安心感。老いてなお「お盛ん」な師匠に、いわきの男が目指すべき生き様を見ました。

認

知症体験会

interview

株式会社 シルバーウッド 代表取締役
下河原 忠道さん

仮想現実・バーチャルリアリティの技術を用い、認知症の人々に見えている世界や、認知症の人々に聞こえている声や音を実際に体験することで、認知症の理解に役立つという「VR認知症体験」。

開発・企画している株式会社シルバーウッドの代表、下河原忠道さんにお話を伺いました。

編集部 モニターに見えてくるのは認知症の方々に見えている世界そのものでした。自分がなぜかビルの屋上の端に立たされ飛び降りるような感覚になる人も多いそうですね。初めて学びました。

下河原 認知症の人たちにとって世界はどう見えているのかを理解することが必要なんです。そこでVRが有効だと考りました。VRって実際に自分の身の回り

はない環境を体験できますし、「誰かに成り代わる技術」とも言える。VRを通して「認知症のある人の不便」を体験すると、今まで見えていた景色とは違うものが見えて来るんじゃないかと。

認知症サポートというと認知症の人を真ん中に置いて、認知症ではない人たちは認知症の人をどうサポートするかという話になります。つまり「自分は健

な第三者で、認知症を患っている人を助けてあげる」という感覚です。でも、それではうまくいかないと感じてきました。例えば、風邪をひいている人を見ると、「辛うじだな」と同情したり、「大丈夫?」と自然に声をかけられますよね。それは、私たち誰もが風邪をひいたことがあって、症状を想像できるからなんです。

編集部 なるほど! 認知症の人々が見えている世界を体験できたら、認知症の人々が苦しんでいるのを目の当たりにした時、「この人はこう見えているのではないか」と想像することができますね。

下河原 ある生きづらさを抱えた人を閉じた関係の中で守つて支えていくことも

必要ですが、体験してみんなで気づいて、同じ人として社会の中で一緒に暮らす。

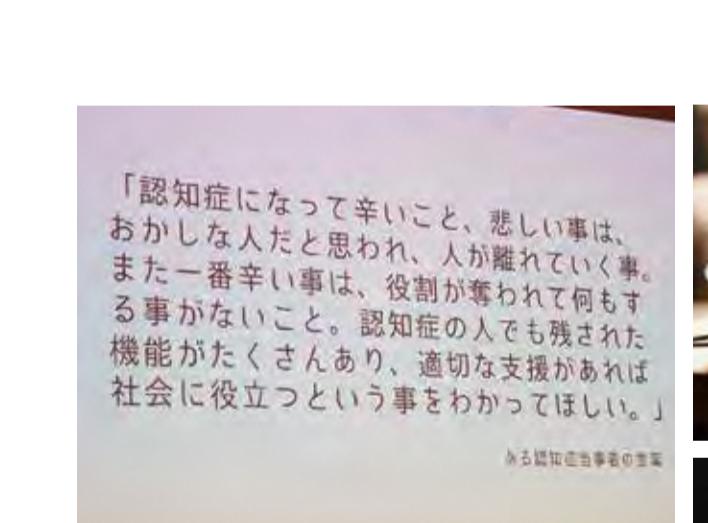
それだけでも変わるとと思うんですよ。画一的な価値観を溶かしていくことで、仮に自分の考えが常識から外れていたとしても、社会につぶされることはなくなるはずです。違うものに寛容な環境のほう

がイノベーションを生みやすくなります。

編集部 体験をする前と後で、見える景色が違ってしまう。アートプロジェクトに参加した後のような衝撃がありました。

下河原 意識しているのは「アングルシフト」です。多様性ってよく言われるけれど、その言葉を生活の中に浸透させていくためには、実際のコミュニケーションの中で腹落ちする瞬間を作ることが大切です。その経験を積み重ねることで、心の中に自由な空間を広げていくことができます。そのためには、実際のコミュニケーションの中でもビジネスとして成立していくことが大事。多くの人たちに必要にされてこれがビジネスとして成立していくこと

そのサービスですしね。ビジネスと社会が変革って、実は近い距離にあるんじゃないかなと思います。アングルシフトといえ



第1話

僕たちメタボ族を叱って!!

紙のいごく、前号の「STOP重症化特集」で、メタボ男子に対するお叱りコメントを頂いた、管理栄養士のすみ子さんと、いう方がいます。健康診断を受けても無視して脂っこいもの食べて、お酒もお菓子もやめられない。そんなんだから重症化しちゃうのよ、限りのない愛と厳しさで不健康を叱ってくれました。思い出します。あいう風に叱つてくれる人がいたら、ぼくたちはダイエッタに成功できるかもしれない。ああ、すみ子さんに説教されたい。おでんでも食べながら、してもらいたい、と……。



01 好間北二区のカカシ
カラスを追い払う目的のカカシを賑わいの演出として用い、スペキュラティブデザインの要素を発見しています。

02 ブス子（シリーズ）

KAWAII の基準を曖昧にしたムーブメントに一切影響を受けずに生まれた孤高の作品だ。

限界芸術発見のコーナー

紙のいごく、好間の北二区集会所にて、地区のお母さんたちが自主的に集まり、夏祭りに向けてカカシを作っていた。私はそのまま様子を取材し、WEBのいごくに記事を書いた。

後日、小名浜のイオンモールにて、とある芸術家とお茶をしている時に、その記事の話になつた。とある芸術家は言った。「あのカカシ、凄いね! あれ、限界芸術」というコトバと出会った。未知との遭遇。なんだかいい予感がする。その時は知つたかぶりをして「まさにそうですね」と答え、あとでググって意味を調べた。

限界芸術の定義を要約すると、「芸術じゃない人が、生活の中から生み出した芸術」である。面白い! いごくの仕事では、最高にローカルな魅力と出会うことがあります。そこで出合った「限界芸術」を紹介します。(いち)

会った「限界芸術」を紹介します。(いち)

編集後記

いごくフェスのダイジェスト映像編集の大詰め作業をしています。収録素材はどれも良いものばかりで使いどころに悩みます(笑)。ネガティブなテーマを知つてから、出演者もお客様もそれぞれ楽しんでいます。自然と良い画が残ります。遺影を撮影したり、棺桶に入ったあとに笑顔になつてしまつたので是非Youtubeでも「いごく」を検索してご覧になってみてください。(たむ)

IGOKU CREW -igoku編集部-

CHIEF	PRODUCE	EDIT	DESIGN	VIDEO
編集長 猪狩 優	プロデューサー 渡邊 陽一	エディター 小松 理恵	デザイナー 高木市之輔	ビデオグラファー 田村 博之

紙のいごく2018年秋号 2018年11月1日発行
発行 いわき市地域包括ケア推進課 印刷 株式会社植田印刷所

シニアポートレート

多くのプログラムが新しくなり、さらにバージョンアップした
2回目のいごくフェス。そんななか、前回と会場も内容も変わ
らず、どつしりと腰を据えて開催されたのが、写真家の平間至
さんによる「シニアポートレート撮影会」。会場に流れていた、
大切で、美しい時間。余すことなくレポートします。

文 瀬谷伸也（いわき市地域包括ケア推進課）／写真 鈴木宇宙

■はいチーズ、おにばあば！

今回参加された方は、年齢も66歳から83歳、大きな団体の会長として精力的にいこいでいる方や、仲の良いご夫婦会社経営者、日々お孫さんと格闘される方などさまざま。動機もいろいろで、終活として遺影写真を意識している方もいれば、一流カメラマンに写真を撮つてほしい方もいました。しかし、コミュニケーションに慣れている方も、中リハーサル室の重い扉を開けた後に広がる「平間写真館」とも言うべき雰囲気には、さすがに緊張気味。

それでも、できあがりの写真を見ると堅さは微塵も感じることなく、当たり前のようにみんなが自然で、素敵な表情の写真になっています。撮影時間は10分程度。その短い時間に、平間さんはいったいどんなマジックをかけたのでしょうか。

リラックスしたスタイリングの合間、

平間さんご本人が、すべての方に「今回撮影を担当する平間です」と挨拶をされていました。丁寧に、ひとりひとりに語りかける平間さん。今思えば、この挨拶

から、すでに「撮影」は始まっていたんですね。

いざ撮影が始まると、皆さん緊張のギアがひとつ上がる感じ。しかし、平間さんが言葉で緊張をほぐしていくんです。好きな食べ物を聞いたり、趣味を聞いたり。撮影されている方も、撮影ということを忘れ、ただ会話をしているような感覺になるのでしよう。

中でも印象的だったのが掛け声。ぼくは「はいチーズ！」しかりませんが、この撮影会ではいろいろな掛け声が飛び交います。好きな食べ物を聞いた後の「せーの、まぐろ！」だったり、お孫さんから普段呼ばれている「ばあば」だつたり。しかもこの「ばあば」が、お孫さんからの「とつても優しいばあばだけど、こわいときもある」の一言で「鬼ばあば」にまで進化！ そんなひとつひとつ言葉が、表情を引き出していくんです。

撮影の肝とも言える言葉や声の力。それをストレートに使えない方もいらっしゃいました。午後1回目の撮影にいらつやつたのは聴覚障害のある方。耳が不自由なので、直接の声は届きません。

■被写体に敬意を払うからこそ、 楽しく、美しく

でも、平間さんのスタッフには通称「笑顔隊」とも呼ばれる百点満点の笑顔を提供するスタッフがいるんです。その笑顔隊が、持ち前の笑顔や、手話通訳からその場で教えてもらった手話を駆使して会話をしていくんです。スタッフ全員が手話で「笑顔」を作ったり、手の形を食べ物のチーズの形にして「はいチーズ」と伝えたり。みんなで楽しもうという想いで、時間と空間が満たされていきます。

ご夫婦での撮影でも、おそらく普段は絶対しないであろう、腕を組んだり、肩に手をおいたりしての撮影。恥ずかしいもあってか最初はぎこちなさもありましたが、会場に流れる優しく楽しげな雰囲

気や平間さんの言葉で、どんどん積極的になっていくんです。みなさん、ほんとうに楽しくてたまらないといった感じ。

■被写体に敬意を払うからこそ、
楽しく、美しく

おひとりで撮影する方、ご夫婦でも撮影する方、さらに家族みんなで撮影する方。それぞれに良さがあって、そこには、その方の人生だけでなく、ご夫婦の関係や、家族だからこそ表情がじみ出でます。そう、出来上がった写真は、どちらが良いとかではなく単純に違いしかない。そこに順位なんて存在しない。あの日のあの場所で平間さんが無数に切った

シャッター、そのすべてがいい写真なんですね。

すべての撮影が終了した後、平間さん

は、こんなことを語っていました。「撮影

会に参加された方々は、皆さん日々ボジ

ティブに生きることを心がけている印象

がありました。ぼくはシャッターを切り

ながら各々の人生をしっかりと後世に残

すことを考えました。それは写真のイ

メージがその人のイメージとして残り、大切な記憶のきっかけになるからです」。

そうか。撮影中頻繁に声を掛けたり、

会話をしたり、もちろんそれも大事なことだけれど、そういう平間さんの真摯な

思いが相手に伝わって、あの写真ができるんだと気づかされました。撮影時間は数十分。けれど、その人が重ねてきました時間は何十年とある。だからまず、誰に対しても丁寧な挨拶から。

そしてそのうえで、被写体の人生を、

真摯に丁寧にユーモラスに記録し、大切な人と過ごす素敵な日常を取り取り、そ

んな時間をお互いに共有する。だから、みんな自然で素敵な表情の写真になる。

それが、平間さんのマジックの正体なのかも知れません。

今はスマートフォンで、いつでもどこ

でも、写真だけでなく動画も撮ることができます。ただ今回、特別だけれど、日常の延長にあるあの場所で撮影された写

真には、いろいろ人のいろいろな想いが詰まつた一枚になっています。動くこ

ともなければ、音が出ることもない。けれど、素敵な時間を共有した思い出その

のです。

今回撮影されたポートレートの一部



猪狩 イエ子さん 昭和19年生まれ



三田 須生雄さん 昭和14年生まれ



山田 昌史さん 昭和16年生まれ

古いの魅力

The charm of old age

平間 至



撮影に参加した方のスタイリングは、前回と同じ作山友紀さん(SLUNDRE)。その人がいちばん輝けるように、表情を引き出すように、丁寧に仕上げていきます。この時から会場の雰囲気づくりは始まっています。

my igoku fes
私のいごくフェス

ラブレターを持って棺に入ってみたひと

杉山伸子さん



入 棺体験に申し込んだのは終活のため。3年前に手術をしましてね。あれから5年を自らに行動しているの。庭の植物を整理したり、今回、平間さんにも写真を撮つてもらいました。菊の花を育てる市民講座にも通つています。できれば棺の中には自分で育てた菊の花を入れたくて。

今回の入棺体験に手紙を持ってきたのは、死ぬときくらいは夫を喜ばせてあげようと思って。20代の、まだ結婚していないかった頃、夫はセールスマンをしていたから、出張先からああだこうだと毎日のように手紙を送つてきました。わたしは1年に1回くらいしか返事しなかつたんですけどね。ちょっとお付き合いしてみようかしらって思つたんだけど、結婚したら本当に大変でした。子どものこともあるし、別れるなんて簡単にできないでしょう？ 夫は「結婚するのに切手代だけで済んだ」なんて言つてたけれど。あの人、今頃くしゃみしてとかしら。

でも、捨てられないものですね。だから日付をちゃんと並べて取つてあるんですけど、今では一番邪魔なものね(笑)。手紙を取つてあるのを夫は知らないと思いますよ。こんな写真撮っちゃって「バカ！」って言われるから。でもね、最期だし、死ぬときくらいは夫を喜ばせてあげようかな、感謝して死にたいなって思つてるの。

老いの魅力

The charm of old age

平間至



猪狩元さん、イエ子さんご一家

普段は別々に暮らす家族が全員集合。家族だからこそその温もりを平間さんが切り取った、全員が主役の素敵なお一枚。

igoku



My igoku fes 私のいごくフェス